

『「探究」する学びをつくる:社会とつながるプロジェクト型学習』のブッククラブ

(2022.7.1)

★今回みんなで読む本



藤崎さと(2020)『「探究」する学びをつくる:社会とつながるプロジェクト型学習』平凡社

★ブッククラブとは？

「特定の本をメンバーが事前に読んできて、面白いと思ったところや考えたこと、そして疑問に思ったことなどについて話し合う会」

吉田新一郎(2013)『読書がさらに楽しくなるブッククラブ』新評論. p.13.

ブック・クラブには、講師も指導者もいません。参加者自らが主体的に学び、参加者同士が学び合う集まりです。そこには、従来の研修会や講演会、従来型の授業とは全く異なった、楽しく、深

い、そして、夢中になれる学びが待っています。探究的な学びを学校に創り出していくために、不可欠な学び方です。

★進め方

- 1 該当の章を読んで、感想や疑問を書いて、自分の読みを披露します。
何でも自由に書き込んでください。過去のブッククラブでは次のようなことを語り合いました。

1 参考になった点／学んだ点／よかった点／おもしろかった点 2 わかりにくい点／疑問・質問／さらなる説明・解説が必要な点 3 やってみたいと思ったこと／応用できそうなこと 4 読み会のメンバーと共有したいこと 5 自分自身の経験（生徒して、教師として）や実践にもとづく考察や評価 6 うまくいったこと、生徒が変わったこと。
--

- 2 他のメンバーの書き込みを読む。
発見があったり、新しい考えや疑問が生まれたりします。一人で読む時とは違う、豊かな読みが生まれます。

- 3 他のメンバーの読みに反応する。
さらなる発見や疑問が生まれる可能性があります。自分の読みに対する、メンバーの反応にコメントすることも自分の考えを深めることにつながります。

誰からのコメントか分かるように **[長崎]** のように名前をつけて、色分けをしたいと思います。[色は早い者勝ちです]

◎期間中に対面（あるいはオンライン）でのブッククラブを開催します。そこで、それまでの読みを深めたり、意見交換をします。

★ブック・クラブのスケジュール

お互いを知り合うためにまずは自己紹介を記入してください。その後は、次のような日程で読んでいきましょう。加えて、オンラインでのブッククラブも計画します。

- 7/4(月) 1.なぜ「探究」する学びが求められたのか
- 7/11(月) 2.プロジェクトベースの学びとは何か
- 7/25(月) 3.プロジェクト型学習が子どもの生きる力を伸ばす
- 8/8(月) 4.「美しい仕事」をする生徒たち
- 8/15(月) 5.「評価」を変えれば子どもも変わる
- 8/22(月) 6.学習し、成長する組織
- 8/29(月) 7.日本の学校への応用
- 9/5(月) オンラインブッククラブ (Zoom)

★Zoomへの参加

トピック: 探究プロジェクト・ブッククラブ [Zoomミーティングに参加する](#)

ミーティングID: 811 2901 8542

パスコード: 64566500

★メンバーの自己紹介 自己紹介を記入してください。

★長崎政浩 高知工科大学 nagasaki21.com



高知工科大学の英語教員をしています。元々は県立高校の教員です。高校教員時代は、商業高校と普通科高校を経験しました。教職7年目に自分自身の授業に限界を感じ、兵庫教育大学大学院で修士を取りました。その後は、教育センターや県の教育委員会で勤務し、10年くらい前に転職をしました。高知工科大学では地域教育支援センター長をしていて、県内の学校との接続の仕事をしています。

若いときから日本の学校教育に疑問をもち、学ぶ楽しさや醍醐味を実感できる授業とはどのようなものか考えてきたつもりです。新しい英語の授業づくりや教師が成長するための方法の開発に関心をもっています。現職の先生たちと、様々な研究プロジェクトを行い、共に学び続けることがライフワークです。

★伴 貴世子 大宮小・香北中 図書支援員

両校の図書支援員をしています。4年目です。

英米文学科を出ているので、強いて言えば専門は...ですが卒業してもう42年になりました。今は孫のような年頃の子どもたちと、図書室で会うお世話役ですね。本のことは何でも聞いて！というのが、先生方からの私の紹介です。

2010年の司書講習で分類を習ってから、この概念を子どもたちに伝えたら進む道が明るくなるという思いを持ちました。実践できる場において、でもICTやら美術系やら理系の内容と得意でないことも多くて、皆さんに助けられながら勤務を続けています。なにしろ教育に興味があります。



★尾知紀彰 山田高校

山田高校の国語科教員です。山田高校6年目になりました。

最近、Googleドキュメントを活用して、授業で生徒に書かせた文章に生徒同士でコメントをし合うという活動を試しています。(勝手にブッククラブ方式と名付けました)

仕事は苦しいことが多いですが、ブッククラブは刺激がもらえる楽しい時間です。
よろしくお願いします。

☆坂本亮 清水高校 国語科

清水高校の坂本です。昨年度までは山田高校に勤務していました。今年度は心機一転、西の端から参加します。

昨年度に比べると余裕のある生活ができていますので、色々と勉強を頑張りたいと思います。よろしくお願いします。



★谷内有紀 高知追手前高校

英語科教員。2年前まで山田高校に勤務。昨年度途中から参加できず(猛省)。今年度は2年理系クラス担任。追手前2年は「探究」✳文化祭なんです。私のクラスは熱気球を上げますが、前任校での色々な失敗が今に活かしているように思う今日この頃です。

★廣瀬智子 高知国際高校

英語科教員。今年は2年生の副担任です。「探究・探究」と言われる日々の思考の整理が今回の本を読むことで少しでも整理できれば、と思っています。

7/4(月) 1.なぜ「探究」する学びが求められたのか

[長崎]

われわれが、学校や教育について当然と思ってきたことについて問い直しを迫られる導入部分だったですね。それも静かな口調で。拳を振りかざして、日本の教育問題点を糾弾するのではなく、21世紀の子どもたちのために、我々に何ができるか、問いかけられているような気がしました。

「画一的学びのモデル」(p.23)という言葉が一言で言い表していると思います。これはある意味、競争による選別、選択のモデルと言っても良いかもしれませんね。偏差値や点数による物差しで、子どもたちを、選り分けるのですから。そこで、良い方向に選別された生徒が多い学校が評価される。

公正(equity)をモットーとする、このハイテックハイと、真逆の価値観と言えそうです。そのような学校が、成績でも上位にある。真の学びは何なのか？という問題を考えるきっかけになりそうです。

メモです。

34- 4つのデザイン指針

- 1 公正であること
- 2 プロジェクトによる学びと人間的成長
- 3 実社会とつながる美しく真正な学びをする
- 4 教師も協働し、学習する組織を実現する

→どれも興味深く、みなさんとその意義を議論してみたいと感じました。学校における公正ということはどう考えるか。

→「美しく真正な学び」という言葉が特にインパクトがありました。

→また、教師のコラボレーションを通して、学校という組織に学びをもたらす。これも、欠けていることだと思います。学校も研修などは結構やっているかもしれませんが、先生方にとって、「美しく真正な学び」は生まれているのでしょうか。

39 「今の学校は、量をこなすことが求められるドリル問題、大量の暗記が求められるテスト、プレゼン発表と同時にゴミ箱行きになる成果物などであふれている」

→「美しい学び」の正反対。

43 教師には綿密さとおおらかさが必要

→これは至言ですね。きちんと学ばせることは必要ですが、教師のコントロールのもとで、何かを与えられるだけの学びで良いのか、そして、教師はそれを管理する立場で良いのか。つきつけられるものはたくさんありますね。

[廣瀬] 私もここに印をつけました。何のために何をしているのかと常に意識していないといけないな、と思いました。

[長崎] 教師のコントロール「好き」と生徒たちの主体的学びは密接に関係していますね。コントロールする方が教師が楽ですからね。生徒たちは empowerされませんけど。

44 「産業界にとって都合のよい」人材を低コストで生産できるシステム」

→このセクションのタイトルは「学校は子どもたちの才能と情熱が会う場所」でした。人材生産システムとの対比が強烈ですね。

[廣瀬] 英語教育の歴史を学んだときにも思いましたが、時代とともに学校に求められる物が変わっていることを俯瞰して捉えられた箇所でした。

[長崎] この作者の書きぶりがとても分かりやすいですね。我々は日々学校で生徒たちに接していて、どうして大きな流れが見えにくくなりますからね。

[尾知]

今、自分が指導しようとしていること、学校がやろうとしていることを見つめ直すことができる内容だったと感じています。

[長崎] 本当にそうですね。すばらしい問題提起。

何度も繰り返されている「公正」という言葉は、「誰もが、人種や性別や性的な意識や身体的、もしくは認知的能力にかかわらず、同じように価値ある人間だと感じることができる」と説明されています。「価値ある人間だと感じることができる」ということが非常に大切なのではないかと思います。

ブッククラブの中で頻繁に出てきている気がしますが、数値だけで人物を評価することはできないと思います。生徒の将来(進路)のためと言いながらやっていることがもしかしたら真逆のことをしているかもしれないという危機感を覚えました。

[坂本]

非認知能力をいかに伸ばすかという視点が、まだまだ足りていないのですよね。自戒を込めて。

[長崎] 「自戒」という言葉が出ました。問題意識が明確にあるということですね。何も疑うこともなく、むしろ、確信をもって、現在の知識偏重の教育に邁進している人は多いですからね。それが一種の「正義」のようにになっている。異を唱えにくい文化はないですか？

35「人はそれぞれ違うのだから、その違いに応じて「同じ結果」となるように導く」

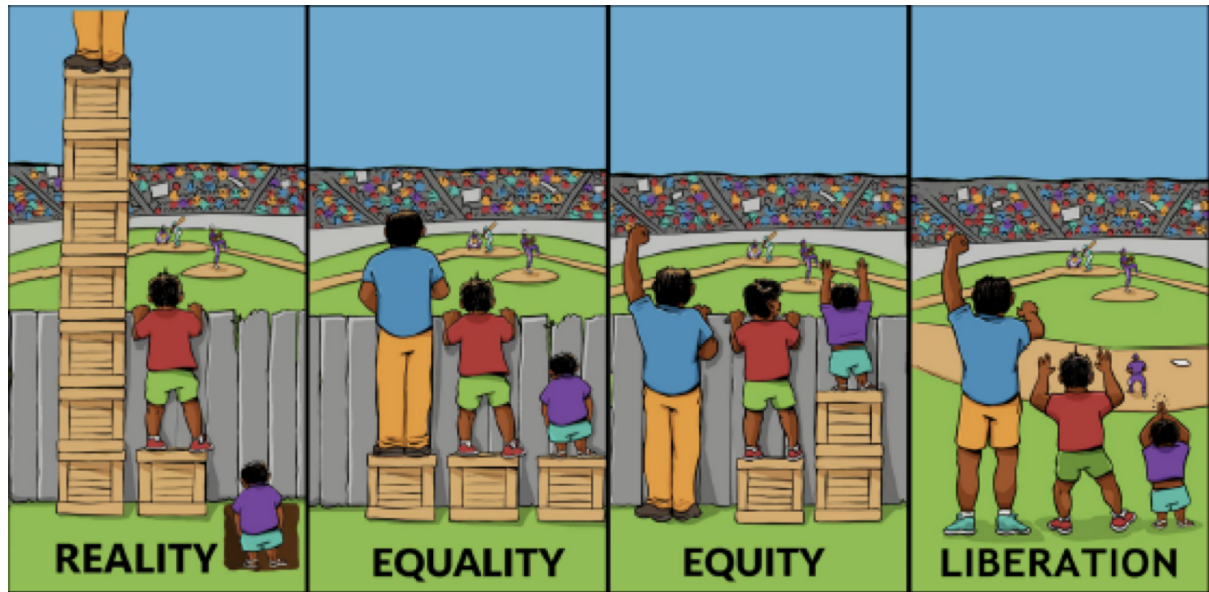
自分達にできる具体的なイメージがあまりわかりませんが、それだけ意識できていなかったということでしょうか・・・

37「公正」の一つの例

私は高知市内の学校に勤務したことが無いのですが、田舎の学校には田舎の学校の課題があり、都市部の学校には都市部の学校の課題があるのだと思います。学校に応じて「地ならし」が異なってくるとは思いますが、何をしたら学ぶためのベースを作ることができるのかは常に考えたいと思います。

[廣瀬]

みなさんも書いていらっしゃるequityとequalityについて、ハッとさせられました。



[長崎] 僕も、以前このイラストを目にしてから、関心をもっていたテーマでした。RealityとLiberationの対比が、とても興味深いですね。

[伴] equityというのはこういう事なんですね。概念がとてもよく理解できます。それにしてもrealityを嘆いていたら、参ってしまいそうです。

31.「社会がこれだけ変わっているのに、学校が変わっていないことに危機感を感じた。」冒頭のデュイのことは「昨日の教え方で今日教えれば、子どもの明日を奪う」と一緒になって、学校と社会との乖離について考えさせられました。生徒たちもたくさんの情報が手に入る昨今、学校ももっとスピーディーに色んなことをアップデートしないといけななと感じました。校則などに話題が集まりがちですが、学校の存在する意味である「学ぶこと」についてのアップデートについて向き合っていきたいと思いました。

[長崎] 我々が、ここ数年、しっかりと向き合っていかなければならない最重要テーマですね。

31.「ハイテックハイほど自分たちが何の目的で何をやっているのかを明確に言語化できる学校はないと思う。」

35.「・・・多様な考え方や経験をしている子どもが集まり、お互いにチームで学び合うことこそが大きな価値をもつ、と教員全体が信念として共有している。」

42.「学校のリーダーたちの重要な役割は、先生たちがリスクをとれるような支援体制を整えることです。」

→これらから、目的・目標の共有がなされていること、その環境を整えようという土壌があることの大切さを感じました。教育は教師の個人戦や自己満足でなく、チーム戦でエビデンスに基づいた取り組みであるべきで、その中で教員・生徒の個性が光るようになれば良いなと思いました。

[伴] 良いチームの集団は強いと思います。学校も自治体も。たいへん賛同する感想です。

[長崎] すばらしい部分を引用してくれていますね。こういった文化や価値観をもった学校をつくっていききたいですね。

[坂本]

初回から日曜日の書き込みになってしまいました。しかも乱文です。読みにくいです。

やはりなんといっても「公正」という、この概念に全てが込められているように感じます。実際、「ハイ・テック・ハイはここからスタートし、ここに終わる」(p.35)とあります。「公正」を実現することを信念として持ち続けたいと思いました。自分はそのために教育に携わっているのだと。

ハイ・テック・ハイはチャータースクールという形式の公立校で...貧困層の子も発達障害の子も通ってくるp.10,11

優れた実践報告の多くが、附属高校だったりいわゆる進学校だったり、「学べる部分はあるけれど鵜呑みにできない部分も多いもの」であるというのは、あるあるだと思います。そういった意味で、この本でこれから述べられていく事例は、どのような学校にも、どのような生徒たちにも、等しく可能性が拓かれていることを示してくれるものであるはずで、勇気がもらえるというか、文化資本の格差などは教員にはどうしようもないのではないかなというような無力感から解放させてくれるものだと期待できます。

[長崎] ここが、この学校のすごいところですね。大阪大学の志水宏吉先生がずっと取り組んできた「効果のある学校研究」(Effective School Research)もこの考え方に近いです。

https://blhrri.org/old/info/book_guide/kiyou/ronbun/kiyou_0195-07_shimizu.pdf ただし、内容については、この本の趣旨とはかなり異なる提案だと思いますけど。

[坂本]

記事、大変おもしろく読ませてもらいました。実は志水宏吉氏の研究は、自分の問題意識や関心と近いので、『「つながり格差」が学力格差を生む』とかいくつか著作を読んでいました。日々、教育(学校)の無力感に襲われるので、たまにこういった研究を読んで、自分を元気づけています(笑)。

少し話はそれますが、志水氏の弟子にあたる(と思われる)知念渉という人の『くヤンチャな子らのエスノグラフィー ヤンキーの生活世界を描き出す』という本も興味深かったので、お時間ある方は是非。教育学というより社会学的要素が強いですが。

[長崎] 僕も以前から志水先生には注目していました。高知に来てもらったこともあるんですよ。教室に根ざした研究者ですね。

以下、メモです。

・貧困家庭に生まれた子どもたちに、具体的な手を打たずに、「...大学など行かなくても何にでもなれる」というのは大人の欺瞞でしかない。(p.18)

・ゴミ箱行きと分かっているにもかかわらず真剣にプロジェクトに取り組む大人はまずいない。(p.39)

・伝統的な学校は圧倒的に「言語優位」の子どもにとって有利な授業になっており、「読み書きそろばん」ができる子がいい点数をとれるようになっているが、それは社会としてリアルでもないし、フェアでもない。(p.39,40)

[伴]p.30 I.13-p.31 I.1

広島、長野、島根、埼玉の先進的なカリキュラムの実践を進めていらっしゃる先生方という箇所を心に留めました。色んな記事を要チェックです。

p.31 II.8-9

学校の内観が美しいから。美学だと思います！

7/11(月)2.プロジェクトベースの学びとは何か

[長崎]

前半は近代の教育の考え方の変遷をとて分かりやすく辿ってくれていて、ありがたかったですね。特に、p.57の表の真ん中「伝達」と「構成」主義のところが大きな境目になっているという点は、しっかりと押さえておきたいですね。

構成主義になったというのは、大きな転換点ですね。構成主義の土台には、生徒に対する信頼や確信があると思うのです。子どもたちは本来学ぶ力も意欲ももった存在であると。だから教え込むのではなく、本人の学びを大切にする。教育は、空のボトルに水を注ぎ込むことなのか、キャンドルに火を灯すものなのかという比喻が良く言い当てていますね。また、民主主義と権威主義による政治体制の違いともパラレルなところがありますね。

しかし、この違いは信仰や政治信条と似たようなところがあって、どちらか一方のみが正義を主張すると、なかなかややこしい。p.63にあるように「それぞれに信念があると考え」、リスペクトすべきなのでしょう。

僕なんかは、たった一度の教員人生なので、自分の信念にしたがって、授業もしたいし、仕事もしたいと思っています。

以下、メモ。

65 「テストが終わったら一瞬にして忘れ去られるのではなく一生の財産になっていく」
→理科の実験などが、「探究」ではなく、「確認」に終わっているというのは辛辣です。他の教科でも似たようなことがあるのではないのでしょうか。英語の授業なんかでも、問題演習とかで、答え合わせだけしかない授業なんて、耐え難いですよね。

[廣瀬] 耳が痛いです・・・伝達と構成の良いバランスを探し求める日々です。。

66 すべてを教えるべきという認識とトレードオフ
→ここでいう「すべてを教える」というのは、「教科書をカバー」するに過ぎないということですよ。身についたかどうか、何かを学んだかどうかには、ほとんど関心がないことが多い。

69 「美的感覚とハンズオン」
→この章でもっともインパクトのあったところでした。以下の5つはすべて重要だと思います。自分自身の教育実践の中でも、つねに意識して実現していきたい項目です。

- 1) 意義のある学習活動
- 2) エクセレンス事例を研究する
- 3) 批評の文化を構築する(kind, specific, helpful)
- 4) 複数回の見直しを求める
- 5) 公のプレゼンテーションの場を提供する
(「教師のための提出物」という捉え方がすごい。その通りだと思う。)

[坂本]

節の小見出しにもなっていますが、63～65ページの「探究は「不安定な状態」から始まる」という説明に納得感を覚えました。特に、そういった「不安定な状態」だからこそ、「数週間のプロジェクトとなってくる」(p.65)とあるように、「探究」は自ずと「プロジェクト型学習」になるという理解は、「探究」をどのように構成・計画していくかということのヒントになりそうです。

「忘れてはならないのは、探究する学び、構成的な価値観が正しく、伝達的価値観が間違っているという風に断定しないこと」(p.61)とある通りですが、こういった本を読むと、「構成的価値観」だけを信奉してしまいそうになりますが、それだけでは説明しきれない「学び」は確実に存在するということを忘れないでおきたいと思います。特に、「伝達的価値観」として説明されている「外部的な働きかけによって“学び”が起きる」(p.59)瞬間を目撃(経験)したことは何度もありますし、教師として、内発的動機づけだけでなく、外発的な手段も手札として常に用意しておくべきだと考えています。

以下、どこかで使えそうと思ったメモです。

・「Kind(親切に)」「Specific(具体的に)」「Helpful(助けになる)」批評ができるように学んでいく。(p.70)

[長崎]「クリティカル・フレンド」は、「批判的なともだち」というよりも「大切な友だち」と翻訳する方がその本質をとらえていると言われます。通常、下のように定義されているようです。とても勇気づけてくれるし、支援もしてくる友人で、言いにくいことでも、本人の成長のためならズバッと言ってくれる。そんなニュアンスをもった言葉です。

"A critical friend is typically a colleague or other educational professional, such as a school coach, who is committed to helping an educator or school improve. A critical friend is someone who is encouraging and supportive, but who also provides honest and often candid feedback that may be uncomfortable or difficult to hear. In short, a critical friend is someone who agrees to speak truthfully, but constructively, about weaknesses, problems, and emotionally charged issues."

<https://www.edglossary.org/critical-friend/>

こういった関係性が成長してく過程では不可欠なのでしょうね。

[廣瀬] 私もこの"kind, specific, helpful"いいな、と思いました。criticalという文化はまだ日本の学校では上手に溶け込んでいないように思います。私たちが生徒のcritical friendsになって新しい関係性のモデルを見せていきたいと思ったことでした。

・「すべての命題の理性的意味は未来のなかに存する」(p.52)

[廣瀬] 「探究」という最近では毎日見聞きする言葉の背景をしっかりと知ることができて良かったと感じるとともに、今まで表面的にしか知らなかったな、と反省しました。印象に残ったことを書いておきます。

p.61 人は一つの主義だけで生きているわけではなく、その時その時で違った考えを使い分けているものである。

→決めつけず、とらわれすぎず、芯があるなかでも柔軟になりたいな～と思われました。

p.65 言葉で「探究する学び」というのは簡単だが、実際には、時間のとてもかかるものである。

→時に昨年からこのことを思い知らされています。数値での結果も期待され、探究学習の成果も期待され、なかなか大変な時代です。時間がかかります、とはっきり言い切ってくれていてさすがしく、安心しました。

p.66 教師は生徒が本当の意味で成長に向かって取り組むことに時間を割かなければいけない

[長崎] 先の、「時間がかかる」ということにも関係すると思いますが、生徒の本当の成長を、どこに求めるかということにかかってくると言えそうです。18歳の高校卒業時に最高のパフォーマンスを発揮することを目指すか、Life-long learnerとして、その先の人生の中でも成長し続けている礎を築くか。

pp.69-70 ...「エクセレンス」が何かを定義するために、そのモデルとなる作品を探すことが必要。

[長崎]「エクセレンス」という言葉の響きはとてもいいですね。僕たちは、そこに到達する手前で妥協していたかもしれませんね。エクセレンスを達成するには、なまやさしい努力ではできないでしょうから。そこに到達する努力の中に主体的な学びがあるような気がします。強制された学びからは生まれないだろうから。

p.70 見直しと修正のプロセスが必須
→形成的評価の意味を再確認できた。

[長崎]「一発正解を言い当てる」といった種類の学びとは、本質的に異なる学び方ということなのでしょうね。

[尾知]

だいぶ出遅れてしまいました。すみません

みなさんが触れている「伝達的価値観」と「構成的価値観」の部分で考えさせられることが多くありました。

探究活動について、生徒に指導しながらも何か自分の中でスッキリしない部分がありましたが、それは「構成的価値観」の方にとらわれすぎていたからだと気づくことができました。

坂本先生が書いているように外発的な手段も持つことが大切だということにはとても共感できます。

[長崎] 確かにそうですね。ただ、日本の教育全体の文脈では、あまりに伝達的価値一辺倒だったので、構成的価値の意義を見直さないと、大変なことになるということだと思います。この問題は重要なので、じっくり考えたいですね。

p.65 しかし～一生の財産になっていくのである。

→ 生徒の姿が想像できましたが、自分の周りにはそのような生徒はあまりいません

p.70 批評の文化・複数回の見直しを要求する

→ 今、自分がやっている授業等でまだ足りていない部分だと思います。

[長崎] おそらく、そのプロセスに多くの学びがあるのでしょうね。良い意味での負荷がかかる場面でしょうから。

7/25(月)3.プロジェクト型学習が子どもの生きる力を伸ばす

【長崎】

具体的に実践がかなり詳しく紹介されていました。それぞれ、実に興味深いのですが、率直な感想は、結構ハードルが高そうというものでした。特に、教員に相当の力量が求められるように感じました。教科横断的に、しかも、知的レベルも下げず、単なる調べ学習的にならず、このようなプロジェクトをデザインし、実行していくのは、容易なことではないなと思わざるを得ませんでした。

自分自身の教科に、こもって、決まった教科書を最初から順番に教える。つまりは、我々、いや、多くの教員が日常的にやっていることの方が、はるかに「簡単に」思えてきます。

実際、教員による講義中心で、一方向、知識伝達型の授業は、もともと成立は容易なのだろうと思います。

しかし、先生が教えたという事実はあるけれど、それは必ずしも生徒たちの「学び」は保証はしていないと言えるかもしれません。

『外国語のエンゲージメント』という本に、「私は教えたのに、生徒がそれを学ばなかっただけだ。」と言うのは「私を車を買ったのに、彼らがそれを買わなかっただけだ」と言うのと同じだ。」という引用が紹介されていますが(p.14)、ずばりですね。

日本の学校でどの程度まで、このハイレベルの実践に迫ることができるのか、なかなかハードル高いように感じました。

以下、メモ。

79 Student-led conferenceと Presentation of learning

→この二つは主体的な学び手を育てるうえで、欠かせない取り組みになるのではないのでしょうか。一つ目の方が、student-ledになっているのが、特に興味深いですね。要は、三者面談を生徒が仕切る！わけです。

88 本質的な問い

→これが実に難しい。国際はこれに近い考え方でやっていますよね？

【廣瀬】 MYPではstatement of inquiryにあたるものかな、と思いながら読みました。こういうことを探究していきましょう、というテーマのようなものはユニットごとに立てています。本質的・・・だと良いのですが・・・昨年度(一部)生徒から好評だったのは、"Our identity is influenced by our relationships with our surroundings and the people around us." (私たちのアイデンティティは周囲の環境や人から影響を受ける)というテーマです。生徒は最初から自分のアイデンティティは1つではないと言っていました、様々な人の人生について読んだり聞いたりしながら各々の理解を深めていった様でした。普通科の生徒からもこのようにテーマがあるとその切り口で思考が深まるといった前向きなフィードバックもありましたが、テーマがあると逆に展開が制限されるような感覚も教える側としては感じることもありました。

90 オーディエンスのヒエラルキー

→これは面白い考え方ですね。一番下に教師がある。教師をオーディエンスとして発表するのは、もともとモチベーションもあがらない。

106, 113 プロジェクト型学習の評価について

→二つのプロジェクトに対する評価が説明されていました。評価そのものよりも、フィードバックの方に力点を置いていると言う点が、重要ですね。

[廣瀬]

長崎先生も書いていましたが、とても素晴らしい取り組み！と思うと同時に、今の現場でやるにはハードルが高い！と感じることも多々ありました。特に今「評価」と「生徒に身につけてほしいこと」について悩んでいるので、そのことを中心に感想を書きます。

<印象に残ったこと>

p.86 評価：・・・評価は情報として示唆に富んだものであり、内省的であり、協働的であるべきである。

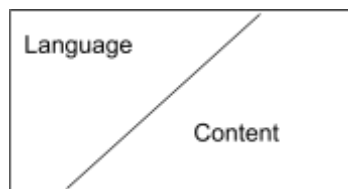
p.106 Q5 …評価に関しては評価そのものよりもフィードバックに力を入れます。・・・フィードバックはその生徒の学びを前に進めるものです。

→昨年はIBのMYPの授業担当をしました。ハイテックハイの取り組みと、IBは親和性の高いものだと感じてこの本を読み進めています。IB教育の実践は私にとってはとってもチャレンジングですが、ルーブリックがすでに提示されていたり、Unit plannerという授業案の作り方のワークショップもあったりと、進むべき順や、方向性は見えていたように思います。一方で、普通科にもIB教育を取り入れようということでルーブリックでの評価もしてきましたし、昨年から本校では観点別評価をする、ということでそこにも取り組むなかで、評価というか目指すべきゴール設定の難しさに直面する日々です。深くまで探究しようとする「英語」という言語学習の側面がおろそかになってしまったり、またその言語学習の側面へのアプローチ方法も従来のものから抜け出せなかったり・・・どっちつかずで、いろんなバランスに悩んでいます。「教科横断型」であることはハイテックハイや探究型の取り組みをするうえでは欠かせないことのように思えます。

[長崎] 外国語科における探究については、ご指摘のと通りの難しさがありますね。探究の手段である言語そのものも学習対象であるという部分ですね。

近年注目されてきたCLIL(Content-Language Integrated Learning)という考え方にどこかヒントがあるのかもしれません。

また、ContentをLanguageの割合を、学習進度に応じて変えるIntegrated curriculumという考え方も、外国語のカリキュラム論では昔から話題になってきたテーマです。ラフな図ですが、下にいくほど学年があがります。初学者の段階では言語面により多くの焦点があてられれば、徐々に内容に比重がうつっていきます。



p.99に「ほとんどの場合、生徒自身も私も最終的に何をつかむのか、またプロジェクトの出来上がりも分かっていません。」とあります。それぐらい柔軟に、ある意味振り切った取り組みができるという背景にはハイテックハイの先生方のレベルの高さやβメンタリティーがあつてこそ、そして目指すべき方向性が共有されているんだな、と感じます。

[伴]βメンタリティーという考えを知りました

これを書きながら、私の意識は生徒の学びよりどうやって成績をつけるのかという方向に向いてしまっているな～と反省しました。言い訳のようになりますが、探究学習は今までやってきたことをアップデートするだけでなく、unlearnしないといけなことが多いです。それがとっても難しい！非常にまとまりのない書き込みですみません。

[長崎] 言われていること、とても良く分かります。僕もいつも格闘していると感じます。従来のように、教えているだけの方がはるかに楽で、簡単な気がしています。

[尾知]

本で紹介されている事例は、どれも、児童・生徒が意欲的に取り組んでいる姿が想像できるし、関わっている先生やその他の方の尽力もイメージしやすい内容でした。ただし、それは綿密な計画と、先生方の（もちろん生徒もですけど）前向きな気持ちがあつてこそ実現するものだと思います。皆さんが書いているのと同じようにハードルが高いということは感じました。

88 本質的な問い(2.簡単には答えがみつからないもの)

山田のグローバル探究科の探究活動の中で、まったく同じ言葉を生徒に提示していただきました。生徒は答えが見つからないことを嫌がっている気がします……教員も答が無いということに慣れていない気がします

90 オーディエンスのヒエラルキー(モチベーション・取り組みへの集中力)

外向けというのは大切なんですね

106 Q6 ……全ての生徒が経験するのは、「意味があり」「インパクトがあり」「美しい」「美しい」何かを自分たちはつくったんだ、という実感だと思います
という考え方を自分もしないといけないとおもいます。

[長崎] この「美しい」というのはおもしろい概念(?)ですね。英語のbeautifulの直訳だと思うのですが、見た目の美醜だけではないですね。辞書には、“a beautifully simple idea”(とても単純な考え)、“a beautifully made movie”(とても出来の良い映画)といった例ものっています。

日本の学校でも、もっと大切にして良い考え方なのかもしれませんね。

[坂本]

教科指導よりも総合的な探究の時間の指導に使えるのだなと思うところが多かったです。もちろん教科学習においても、本書で書かれているようなことが実践できればよいのですが、みなさん書かれているように「全部をそのまま」はハードルが高そうです。

特に印象的だったのが、単元の始まりを重要視していた点です。

プロジェクトの開始部分は重要で、フィールドワークをしたり、ゲストスピーカーを呼んだり、…十分に生徒の興味を引きつけることと、プロジェクトを遂行するにあたって必要な、オーセンティック(真正な)経験をすることが求められる。(p.91)

プロジェクト開始」では、教師と生徒、および生徒同士での信頼関係を構築し、これから数カ月わたって取り組むためのモチベーションになるような、印象深い経験を共有することが必要不可欠である。(p.94)

といった記述などです。教科の指導においても「導入」が軽んじられる傾向があるように思いますが、「今日は『山月記』を読みます」とか「今日から二次関数について学習します」というような導

入ではなく、「生徒の興味を引きつける」「興味深い経験」を用意することは非常に重要なことのように思われます。それをしないのは教師の怠惰ですし、教師自身がその指導内容の学ぶ価値を認識できていない可能性すらあると思います。

[長崎]「それをしないのは教師の怠惰」全く同感です。というか、これまでの前提は、「生徒が学ぶもの！」という意識が強くあったことも影響しているでしょうね。高校の場合は、「義務教育ではない！」といった意識もあると思います。

しかし、それは「教える」を前提とした考え方だった。生徒たちが「学ぶ」かどうかは考えていなかった。生徒たちの学び(主体的な学びといってもいい)を考えた時、factsや知識を「伝達する」だけの授業では不十分ということでしょうね。

単元のまとめについては第1章に「ゴミ箱行きと分かっているにもかかわらず真剣にプロジェクトに取り組む大人はまずいない」(p.39)とあったこととつながるのですが、p.90の図「オーディエンスのヒエラルキー—モチベーションを上げるための仕組み」はとても有用ですね。本校、総合の最後の発表を時間の関係上、代表グループのみにして、その他のグループは人前で一度も発表しないことが先日決まったのですが、やはり何とか全員発表できるようにしなければいけないと決意を固くしました。p.90の図を共有しようと思います。

[長崎] 学校ではいろいろな決断がなされるわけですが、「学校」や「教師」の都合によってなされることが多いですね。子どもたちの学びにとってどうか、その視点から決断してほしいものです。

総合の発表なんかでは、まずポスター発表のような形にして、全員がやって、そのうえで、ステージでは代表グループがやる。そういった方法も考えられますよね。

[伴]p.86 II.7-10

これらPBLの9要素を検討し、プロジェクトの計画を行うのは、その教室に関わる複数の教師、具体的には2名の担任(1人は人文、1人は理科・数学が専門)と専科(アート、テクノロジーなど)の1名の計3名が基本単位となり、プロジェクトのベースプランを立てる。

やっぱりね！と思いました。理想的です。これを1教科1教員の香北中が挑むのか〜と、これまでの先生方の準備と実践を何てハードだと驚きながら見てきました。でも市教委にも、これを根拠に人材投資を考えていただきたいです。

[長崎] 学校を含めて、世の中 SDGsブームみたいなのがありますが、学校というところが一番 Sustainableでない働き方をしているかもしれませんね。

行政のサポートはとても重要だと思いますけど、一方で、先生の良い「反逆」にも期待したい。単なる「反対」はダメだと思います。英語でも”Positive NO”という言葉があります。勇気をもって捨てて良いものがあるんじゃないでしょうかね。

8/8(月)4「美しい仕事」をする生徒たち

[長崎]

とても素敵な章のタイトルです。そもそもがハイテックハイが美しい仕事にこだわっているからこそなのでしょうけど。「エレガンス」(p.119)という言葉も見えます。「彼らはワークシートの穴埋めの

ためにいるのではなく、独創的で美しい作品をつくりあげるために存在している。」(p.119)という記述には、羨ましささえ感じました。

なんだか、別世界のような、僕たち日本の学校は、「美しく」働いているだろうとか、自問してしまいました。

先日、Google Lensに「宿題」という機能が追加されたのをご存知ですか。この是非をめぐって議論が起きています。この機能、驚きです。例えば、手書きの数式をカメラで撮影すると、その答えが表示されるのです。ここまで来たかという感じです。

僕は賛成派です。でも、日本の多くの高校教員は反対するかもしれませんね。知識を覚えることを否定されるわけですから。

もう、こういったことは、AIや機械に任せて、人間はもっとクリエイティブで「美しい」ことに夢中になる方が良いと思うのですが、どうでしょうか？

[谷内]昔の私は反対だったと思いますが、現在は賛成です。文化祭にホームで熱気球を上げるのですが、Googleで数字を打ち込めば、熱気球の体積や必要な熱量等がグラフで出るアプリがあるようで、非常に助かります。生徒が1回1回計算をするとなると時間がかかりますし、時間をかけるのはそこではない、と言い切れるからでしょう。ただ、生徒がその計算ができ、その意味がわかっているから、ということもあるのではないかと思うわけです。どうでしょう？

◎118 私が最も価値があると考えているのは生徒が美しい作品を創造することをサポートすることである。

→わかっても大変難しい「サポート」。昨年異動してから、3年ぶりのホーム担任ということもあり、自分の中で、「多くを語らず、生徒の様子を観察する」ことを心がけるようにしています。が、これが結構難しい。

◎120 「一生懸命取り組むことが安全でかっこいい、つまり、「美しい」と子どもたちが意識することが必要」

→「エクセレンスの倫理」

という言葉を使っていますが、学校の「文化」といっても良いかもしれません。この文化はとても重要だと思います。

◎121 「次第に、社会や学校の環境が貧しくなっている。そうすると、「エクセレンス」や「美」は隅に追いやられ、「皮肉」「中傷」「怠慢」などが新たな価値としてせり上がってくる。今、世の中は「美しい」だろうか。」

→実に強烈な問いかけですね。僕はこれに「競争」「格差」といった言葉を加えたいと思います。

◎123 「批評」は「審判」することではなく、ましてや作品をけなすものでもなく、よりよいものをつくっていくための「プロセス」なのである。

→「健全な批評がお互いを鍛える」がこのセクションのタイトルでした。これこそエクセレンスなのでしょうね。「正解対不正解」という単純な対立からは見えてこないプロセスなのでしょう。

124 批評の基本的な考え方

(1)優しく、具体的で、助けになる批評(kind, specific, helpful)

(2)コンテンツに対しては厳しく、人には優しく

(3)すべての人の「声」が受け取れるように

→特に(2)(3)は日本社会は苦手ですね。坊主憎けりや袈裟まで憎いみたいな。意見と人物を切り離すのが苦手(ディベートが嫌われる理由でもある)。また、反対意見を封殺し、排除するような空気が強くなっている感じがしますね。悪き忖度もある。

[坂本]

(3)の感覚のなさはひしひしと感じます。生徒たちに何かを決めるために話し合いをさせるとすぐ多数決をしたがります。そのたびに「多数決は反対意見が生きない。万能ではない」という話をしますが、なかなか浸透しません。それでも、(3)のようなことを大切にすべきだとしつこく語りかけていくしかありませんね。ちなみに、「多数決の前にもう少し意見を出し合ってみて」と伝えると、大体もっと良い意見が出てみんなが納得する結果になることが多いです。自分の経験則ですが。

[廣瀬] p.129にあるように、建設的な批評には「痛み」を伴う、ということを早い段階から浸透させていく必要があると感じました。自分自身も(1)～(3)に慣れていないこともあり、つつい傷つけないように・・・という考えが働いてしまいます。「意見と人物を切り離す」という発想に切り替えて行きます！

[長崎] 多数決が民主的と思っているフシがありますよね。民主主義は決して「多数決による合意形成」ではありませんよね。あえて言えば「対話による合意形成」。その意味では、日本の民主主義はまだ未熟なのかもしれません。

建設的な批評は、実に難しいですね。相手を大切に思うのであれば、本当は痛みを伴う批評もぶつける必要があるんだけど、意見が異なることは「悪」といった思い込みというか、同調圧力みたいなものが邪魔をしているのかもしれない。

[谷内] (3)について。今年度、クラスのリーダーが、「合意形成」で全てを決めたいと言いました。最初に私が多数決で決めることをできればやめたいとクラスに話したのですが、どうなるかな、と。それから全て意見を出し、代表者がプレゼンし、納得が行くまで話し合いをしています。ものすごい時間がかかりますが、こうして人は様々な「声」を知るんだなあと感じます。人数の多い少ないが関係なくなると、話し合いの様子も違うように思います。反対意見も出しやすいように思います。教員は入ってはいけないかもしれませんが、生徒と同じ条件で私も参加者として意見を述べることもあります。(プレゼン1分とかの条件は生徒と同じで)

p128 学業がうまくいってない子どもは、多くの場合、「厳しい指摘をしない」という甘やかしの中で本来受

130「馴れ合いでない本当の意味での優しさ」

→こういった厳しさとポジティブさをもった学校文化が育つといいですね。

[坂本]

以前ブッククラブで読んだ本にも「学校文化」の話があったように記憶していますが、やはりこの本にも「「美しい仕事」を成立させる鍵は、「文化」にある」(p.120)という記述がありました。どのような学校文化を作るのか、どのようなクラス文化を醸成していくのかという視点の大切さを以前にも増して感じています。

ハイ・テック・ハイが素晴らしいのは、「公正」や「批評」といったことを具体化し、原則化することで文化として根付かせていったことだと思います。空気のように何となく皆が共有している「文化」

ではなく、明文化され明確に共有されている「文化」であるということも肝要な点でしょうか。教職員や生徒の中で価値観が共有されているとも言えると思います。教職員が常に「公正」や「批評」といったことに向き合い続けた結果なのでしょうね。

[廣瀬] 学校の「文化」、私も読みながら考えさせられたテーマでした。私には自分たちが生徒と一緒に学校の文化を作っているという意識が欠けているな、と気づかされました。

[長崎] 教師と生徒と一緒に学校文化をつくるという視点は、今後ますます重要になるかもしれませんね。これまでは、ルールも文化も大人がつくり手で、生徒たちはそれを守り、受け入れる側でした。ルールや文化や意味のつくり手は誰になるかは、とても重要な気がします。

[谷内] 「伝統」と「文化」は違うように思いますがどうでしょうか。ここが同じだと思っているから変わらない？最近、クラス運営について若手教員から質問されることが増えてきました。（職員室の横にホーム教室があり、合意形成など活動をしていると目立つことも理由でしょう）これから未来ある若手教員が「こうしたい」という気持ちを持てる「学校文化」を形成したいと思っていますが、、、。

[坂本] 谷内先生お久しぶりです。「文化」は可塑的・可変的なもので、「伝統」は（基本的に）不変的なものということでしょうか。「伝統」に邪魔をされてしたいことができないという経験は僕自身はあまりありませんが、〇高校はそういうこともありそうですね...（バイアスかかりまくりますみません）

[谷内] 坂本先生、私も文化は可変的であると思っていますが、そうではないという出来事がつい最近ありました。私のやり方が衝撃的だったようですが、私はそうではないと思っている方が衝撃的でした。こういう状況を少しずつ変化させたいなあ、と。

「批評のプロセスを支える3要素」(p.123~)や「批評の規範」(p.126~)あたりは、そのまま使えそうだと感じました。

[伴]

長崎先生と同じ所にも付箋をつけました。

p.118 Ⅱ.9-10

ハイテック・ハイのカリキュラムはこころと手を一緒に動かし「つくる」ということに、いったんな学校のPBLより重きが置かれている。

p.119 Ⅱ.5-7

生徒たちは私の授業で、しばしば科学者、建築家、歴史家、作家、芸術家などと授業をともにするが、彼らはみなそれぞれの分野で「美のセンス」をはっきりと表明している。

p.119 Ⅱ.13-15

彼らは、他の多くの学校の生徒とは違った目的を持っている。彼らはワークシートの穴埋めのためにはいるのではなく、独創的で美しい作品をつくり上げるために存在している。

[長崎] この記述は衝撃的でした。日本の教育は、どちらかと言うと、ドリル的な学習や繰り返しの演習、いわば「量」を必死で追い求めてきた。そこで勝者と敗者が決まってきた。「独創的で美しい作品づくり」などというのは、無駄とは言わないまでも、あまり大切にされてこなかったですね。

そういった心の豊かさみたいなものが育っていないと、乗り切れない時代に入ってきているように思えます。成熟した社会と言えは良いのでしょうか。

日本はこの30年間、先進国で唯一経済発展をしていない。所得も増えていない。教育との因果関係は、分かりませんが、少なくとも、教育の世界は、30年前と大きく変わっているようには見えない。危機感をもっている人はたくさんいますけど。。。

8/15(月) 5「評価」を変えれば子どもも変わる

[長崎]

成績をつけるときは、いつも悩みます。みなさんはどうですか？自分自身の決断が本当に正しいのか、本当に生徒たちの成長につながるのか、生徒たちの努力とその成果を正確に反映できているか？実に難しい問題です。

この章は、そんな評価についてのジレンマに、渾身の力で答えようとしているハイテックハイの様子がよく伝わってきます。

高校でいえば、18歳時点の知識や学力の到達度をより正確に測定し、それを示すことを重視するか、それとも、その生徒が生涯にわたって意欲的に、自律的に学び続けることができるように、そのようなマインドセットを育むことを重視するか。これが、評価に対する考え方の分かれ目になる。

僕は、後者側に歩んでいく必要があると思っていますが、みなさんはどうですか？やはり、偏差値の高さ、国公立大学の合格者数などが気になりますか？

著者の藤崎さんは、このあたりのことを非常に的確に指摘しています。

「大学受験で高得点をとるためには、長期にわたる「知識の詰め込み型」の授業が有効であると考えられている。ほとんどの大学の入学試験が「知識の詰め込み」を要求するため、子どもたちに詰め込み型を強いてきたということだろう。そうしたネガティブ・スパイラルのなかで、合理性のない授業に学校そして教師は違和感をもちつつも、日々の忙しさや組織の問題など様々な理由で深く振り返ることなく継続しているのが現実なのである。」(pp.158-159)

いずれにしても、評価の問題は、実に多くの重要な問題を含んでいるので、これからも考え続けていきたいですね。

[廣瀬] 読みながら、「そうなんですよ～」と思いました。ただ、大学入試が変わっても「知識の詰め込み型」の授業スタイルは教員のmindsetが変わらないとそのままだろうな、とも思います。今私自身も高校2年生の授業担当をしながら葛藤の毎日です。大学受験突破が生徒の人生のゴールではない、と分かってはいますが、まずはその希望があるならかなえさせなければという思考にもなります。良いものをアウトプットするために必要な知識や技能は身につくというハイテックハイの考え(p.157)はIB教育にも通じるものを感じます。ただ、そこまでストイックに、忍耐強く自分が取り組んでいるのだろうか。こういうアイデアを信じ切れているのだろうか。中途半端

だから知っている方法に戻ってしまうのではないだろうか。とモヤモヤする日々です。ブッククラブのように自分の視野を広げる機会があるのはありがたいことです。ちょっとずつできるところから理想に向かって変化させていきたいし、その「理想」が自己満足にならないように勉強しつづけないとな～と思った章でした。

[谷内] 同感です。「これが私がやりたいことなのか」とほぼ毎日考えます。でも諦めてしまったら終了ですので、少しずつ前進するために学びたいと思います。

[長崎] 悩ましい問題であることは事実。知識詰め込み型とは言え、その中で行われるある種の「知的トレーニング」は、やはり若者の成長にとってマイナスばかりではないと思うからです。以前、読んだ翻訳した本の翻訳作業では、「頭が煮える」ほど考えた場面がありました。一つの知識の体系に深く取り組むことは悪くないと思います。

ただ、そのような教育を戦後何十年も続けてきて、高度経済成長のころまでは良かった。日本は世界のトップを走っていましたから。そして、それを下支えしたのが、今もって我々が離れ難く守っている、教育の方法です。そして、この30年の日本の凋落はものすごい。

どうすれば良いのでしょうか。

136 生徒中心の評価へ

→ルーブリックを各学校が生徒の自己評価で作成していますよね。そこで打ち合わせ等で必ず教員から出る意見として、「自己評価がかなりズレている生徒」についてだったと記憶しているのですが、それについて私自身が説明できるような手だてがありませんでした。ハイテックハイの例を知り、良く考えられているな、と思いました。

[長崎] 自己評価は難しいですよ。力はないのにものすごく自己評価の高い生徒もいるし、その逆もしかり。まあでも、このように発想してしまうのは、評価＝成績という呪縛から我々が自由になっていないからですよ。

生徒たちが本気でより成長しようと思ったら、きちんと自己評価をするはずですよ。野球部の生徒が、「本気で」内角球を打ちたいと思ったら、今打っているか？打てていなかったら何が問題が真剣に考えます。

137 テストや評価は定期テスト中心への疑問

→そろそろ見直しの機運はありますね。

150-157 ハイテックハイの進学実績

→特に、興味深いのは大学卒業率が高いことです(155)。探究的な学びを中心に据えることで、全体的な学力レベルがあがるのは、堀川高校などでも証明されているのでしょうけど、学び続けるようとする姿勢が育っているところが大きなポイントのように思えます。学校や先生が追い込んで、詰め込んでいくのとは正反対の考え方ですね。先生にとっては勇気のいることでしょうけど。「実績を落としたいくない」と多くの人が恐れているのですから。

[谷内] 堀川高校の例を出すと決まって「堀川だからできている」と言われるのですが、「こうすればうちでもできる」としたいですね。

[長崎] この発想がどれだけの若者の可能性を奪ってきたか！

158-162「一般的なテストの常識からはかなりかけ離れたテスト」

- 1 グループテスト。
- 2 テストで成績をつけない。
- 3 テストに意味合いをもたせる。
- 4 納得するまでテストを繰り返し受けても良い。

→確かに、良い学びを生み出すためには、評価やテストの見直し急務だと思うのですが、現在の枠組みから、すぐには飛び出せないと考えている人は多いものです。少し角度を変えて、テストや評価を眺めてみるのが、一歩を踏み出すチャンスになると思うのですが、どうでしょうか？

[廣瀬] 観点別評価が導入されたことで何を指して何をしているのか、を考える機会が多くなったなと個人的には感じています。英語科では外国人の講師を中心に毎年新しいシラバスをつくって授業がすすんでいくことへの改善をしていこうとしており、各学年でどのスキルが身についているかをもう一度具体的に考えようとしています。それに基づいてそれぞれの教員の方法で以前からあるものを活かしていけばもっとよいカリキュラムができるのではないか、と。そのための1つとしてテストのイメージを作ってみて全体で共有してみようか、という話にもなっています。大変な作業になりそうですが、価値はあると考えます。

[谷内] 廣瀬先生、いいですね。毎年新しいシラバスを作って授業が進む。是非教えて欲しいです。

[長崎] これは一度集まって議論したいテーマです。僕は大学に勤めはじめて、検定教科書によらない、自分でシラバスをつくる日々を送っていますが、これは決して簡単なことではない。もちろん、自由度はあるし、教員としては楽しいところはあるけれど、本当にこの授業が伸ばすべきものを伸ばしているか、自問することしきり。

[廣瀬] p.154 異学年で構成されている「アドバイザー」について、県外のドルトンプランを実践する学校で働く知人から、生徒たちはこの異学年間の交流をすごく楽しんでいて、学びもあるようだと言われてもらったばかりでしたので印象に残りました。

[長崎] 神奈川県だったか、どこかの私学女子校で「メンター」という授業があるというのを聞いたことがあります。高校生が中学生の授業にメンターとして入るというものでした。

[坂本]

〈自分の強みを表すカードの実例〉(p.141)や「自分の強みを可視化する」「コンパス・ポイント」(p.142)など、非常に有用であると思いました。長期的なグループ活動の一番初めに、このような自己評価をすると、自らの位置づけやグループのメンバーに何を頼ればよいかがということが明瞭になります。また、診断的な自己評価をしておくことで、自らをそういう性質へとより強く方向づけしていくことができると思いました。例えば、仮に自らを「新しい経験に飛び込むのが好き」と評価していても、「新しい経験に飛び込みたくない」と思ってしまう時があるものですが、そういった時に、自らを「新しい経験に飛び込むのが好き」と評価していたことを思い出し、その評価に(良い意味で)「縛られて」、行動できるということがあり

得ると思います。診断的な自己評価は、そのような可能性も秘めているのではないのでしょうか。(これについては、検証してみないと確かなことは言えませんが。)

〈エグジットカード〉(p.147)を使った「ピア評価」は、探究の時間で今すぐにでも実践ができそうです。先日、土佐清水市に「堀川の奇跡」で有名な荒瀬克己先生が講演に来ていて、繰り返しおっしゃっていたのが、「探究は生徒を中心に据えた時間にせよ」ということでした。「こうした問いから...課題を洗い出し、生徒は自分たちで問題を解決していく」(p.148)といった記述を読んでいて、荒瀬先生のお話を色々と思い出すことができました。課題は多いですが、できることから始めないといけないですね。

[谷内] 坂本先生、「その評価に(良い意味で)「縛られて」、行動できるということがあり得ると思います。」そうかもしれないと思いました。私の担当しているクラスは(私からすると)非常に真面目です。しかし自己肯定感はそれほど高くない気がします。自分の強みを表すカードをやるとどうなるかな、と。坂本先生が言うように、自分の強みを自分で認識し他者に伝えたことで、良い影響を受けるかもしれませんね。荒瀬先生の講演記事(高知新聞)を読みました。聞きたかったです、、、。

日本経済新聞に大学入試についての特集記事が掲載されていて興味深いですよ。(8月15日～)

[長崎] 一度、みんなで評価の問題を考えたいですね。

8/22(月) 6.学習し、成長する組織

[長崎]

この章で、もっとも印象的だったのが冒頭の「教師が非常に楽しそうに、そして、満足して仕事をしている」(p.166)という部分でした。「教師たちは総じて情熱的であり、自分の教室のことを話し始めると止まらない。」ともあります。

たった一度の教員人生なのだから、あまりいろいろなことに「忖度」せずに、やりたいと「信じたこと」をやれば良いじゃないか。僕は、ずっとそう思ってきました。

教師のバーンアウト(燃え尽き症候群)の研究でも、いくら忙しくても、自分の教育実践の改善に取り組み続けている教師はバーンアウトになりにくいと言われています。

「教師の多忙」ということが大きな課題となっていますが、単なる「量」の問題ではないと言えます。

次に、冒頭に「すべての組織はメンバーの考え方や相互作用の産物である。」というピーター・センゲの言葉が引用されています。主体的な学びを探究しようとすればするほど、この言葉が核心をついていると実感します。

僕はスピーチやプレゼンの授業では、学生たちの主体的学びづくりを実践(実験)しています。学生主導の授業の進行や学生同士によるピア・フィードバックなどが中心です。授業の中に、

learning communityをつくる。それが実現できることが、a life-long learnerに成長する第一歩だと思っています。

そのような教室づくりをしてみると、センゲの言葉の意味が理解できるように感じるのです。教師が一方向で与える授業の時にはほとんど感じられなかったことです。

グループダイナミックスとでも言えば良いかもしれませんが。学生たちの意欲や考え方、熱意、そういったものの相互作用で、communityが生まれ、それが成長していく様子は、目を見張るものがあります。感動的でさえあります。

しかも、それは年によって変わります。構成メンバーによって、様々な色合いを見せる。今年は、とても良い感じでcommunityができました。去年は、やや停滞気味で、今年とは違い働きかけが必要でした。

明らかに、教員の役割は、従来の授業とは変わっています。

以下、メモです。

170 組織学習の5つのディシプリン

→興味深い考え方ですけど、この本の記述だけからはつかみきれないところがあります。少し難解です。オリジナルの翻訳がありますが、900ページ近い大書で、まだ読んでいません。

174 「ある種の教育モデルは生徒たちの依存性を強化して、学びの喜びを奪い取ってしまう。」
→自己マスタリーに関する記述です。「まじめな生徒ほど「先生を喜ばせる」「よい成績をとる」といった自己マスタリーから離れた方向に進んでしまいがち」という記述も見えます。イメージとしては、「自律的な学習者」の育成でしょうか。

与えられたことをまじめに、忠実にこなすのと、自分のやりたいことを見つけてそれを探究することの間には大きな違いがありますね。

175 「人生において一番大事なことは、「自分の才能と情熱が出会う場所」を見つけること」
→ケン・ロビンソンの言葉。これまでは、第三者が決めた基準(点数)に合わせることが重視されたため、このような発想は生まれなかったのかもしれない。

176 「「教師一人ひとりの人生」を尊重し、尊厳をもって教師が仕事ができるように援助しなければ、多様性のある、創造的な教育はできない。」
→みなさん、どうですか？みなさんの学校はそうなっていますか？

このような組織の実現には、リーダー(管理職)の考え方や姿勢が重要なのは言うまでもありませんが、一人ひとりの教員の重要な役割を果たすと僕は思います。現状を批判するだけでは何も変わりませんから。自らのアクションで、凌駕していくという大胆な発想も必要なのでは。

8/29(月)7.日本の学校への応用

9/5(月)オンラインブッククラブ (Zoom)